

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長

平成23年度病虫害発生予報第4号（7月）について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

予報第4号

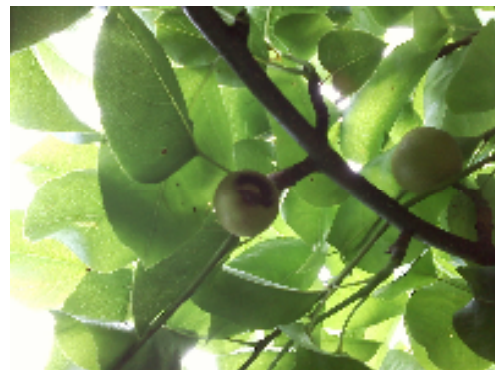
ブドウとナシの防除を徹底しましょう！

本年は5月下旬以降降雨が続いたため、ブドウべと病は早い時期から発生が認められています。また、ナシ黒星病の発生が早い時期から増加しており、今後の天候によっては、発生の急激な増加が心配されます。

ブドウのべと病が多発すると、早期に落葉します。また、ナシ黒星病は果実の肥大後期にも発生が増加します。現在、発生の多いほ場はもちろん、未発生ほ場でも予防散布を徹底して、被害防止に努めましょう。



ブドウべと病（葉）



ナシ黒星病（果実）

＜予想される向こう1か月の天候（平成23年6月25日～7月24日）＞

期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、後半は平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の気温は平年より高いでしょう。降水量は平年より多く、日照時間は平年並でしょう。週別の気温は、1週目は高く、2週目は平年並で、3週目以降は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

| 要素 | 低い（少ない） | 平年並 | 高い（多い） |
|------|---------|-----|--------|
| 気温 | 20 | 30 | 50 |
| 降水量 | 20 | 30 | 50 |
| 日照時間 | 20 | 40 | 40 |

（福岡管区気象台 平成23年6月24日発表抜粋）

向こう1か月間における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

| 作物名 | 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (7月の発生予報) | |
|--------------|--|--|--|--|
| | | 平年比 | 平年比 | 前年比 |
| 水稲 | いもち病(葉いもち) ヒメトビウンカ 縞葉枯病 セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ | 並 やや多 並 少 並 並 | 並 やや多 やや多 並 並 並 | 並 やや多 並 やや少 並 並 |
| かんきつ | 黒点病 ミカンハダニ | 並 少 | やや多 やや少 | やや多 やや少 |
| なし | 黒星病 ナシヒメシンクイ | 並 並 | やや多 並 | やや多 並 |
| ぶどう | べと病 | やや多 | やや多 | 並 |
| かき | 炭疽病 フジコナカイガラムシ | 並 並 | 並 並 | やや多 並 |
| いちじく | アザミウマ類 | 少 | 少 | やや少 |
| 果樹共通 | カメムシ類 | 少 | — | 少 |
| 茶 | 炭疽病 もち病 輪斑病 チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ | 多 多 並 やや少 並 やや少 少 少 | 多 多 やや多 やや少 並 やや少 並 少 | 多 多 やや少 並 多 少 並 並 |
| イチゴ (育苗期) | うどんこ病 炭疽病 | やや少 やや少 | 並 並 | 並 並 |

注：果樹共通 カメムシ類の発生量(現況)は前年比

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成している。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物：水稻】

普通期水稻

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

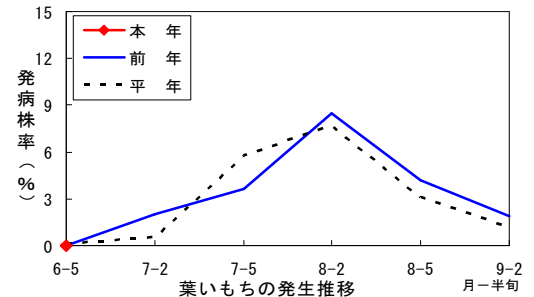
発病株率 0.0%（平年 0.1%、前年 0.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 補植用の置き苗は本病の発生源となるので、早めに処分する。

イ 箱施薬剤が施用されていない場合は、発生を認めたら薬剤散布を実施する。



2 ヒメトビウンカと縞葉枯病

(1) 予報の内容

ヒメトビウンカ 発生量：平年・前年よりやや多

縞葉枯病 発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア ヒメトビウンカ：6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

10株当たり成幼虫数 3.1頭（平年 1.8頭、前年 2.0頭）

イ 縞葉枯病：6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.0%（平年 0.0%、前年 0.4%）

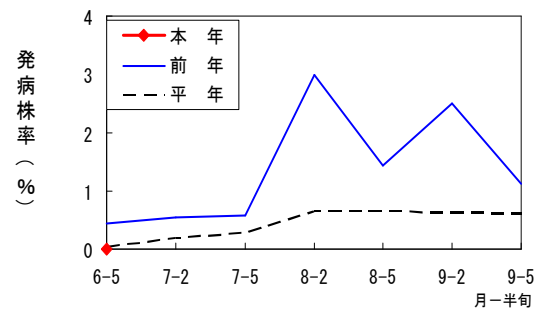
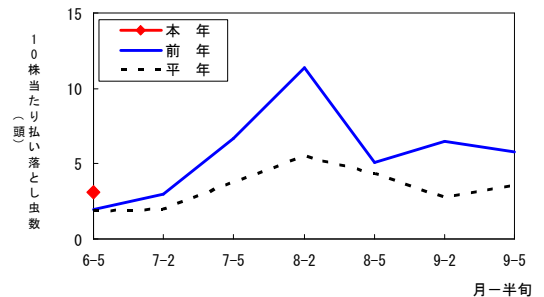
ウ ヒメトビウンカ越冬世代のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、12.6%と平年より高かった（+）。

（平成15年から8年間の平均 6.8%、前年 9.8%）

(3) 防除上の注意

ア ヒメトビウンカ越冬世代のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率が高いため、移植期が早い（5月上旬～6月上旬植）ほ場で、本種の発生が多い場合は、効果の高い薬剤で防除を実施する。

イ 発病株を認めたら直ちに除去する。



3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

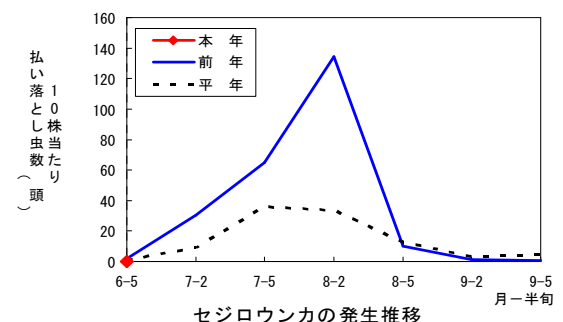
(2) 予報の根拠

ア 6月3～4半旬に飛来があった（+）。

イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

10株当たり成幼虫数 0.1頭（平年 0.8頭、前年 1.9頭）

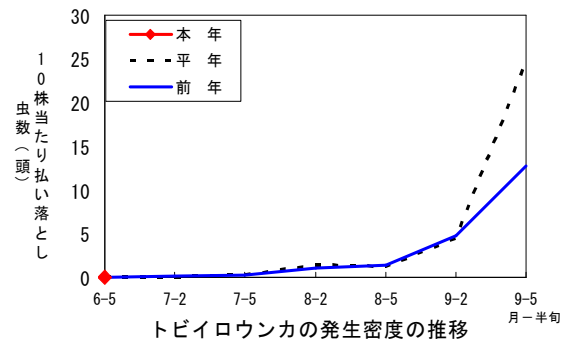
ウ 向こう1か月の気象予報では、前線の影響等により降水量が多いとされている（±）。



- (3) 防除上の注意
今後の飛来状況に十分注意する。

4 トビイロウンカ

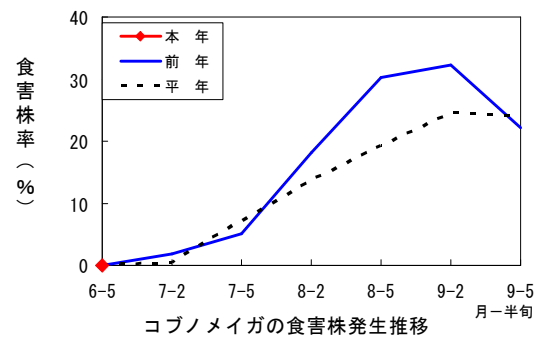
- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
10株当たり成虫数 0.00頭
(平年 0.00頭、前年 0.03頭)
イ 向こう1か月の気象予報では、前線の影響等により降水量が多いとされている(±)。



- (3) 防除上の注意
ア 今後の飛来状況に十分注意する。
イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。
なお、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。

5 コブノメイガ

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
30㎡当たり払い出し成虫数 0.00頭
(平年 0.04頭、前年 0.07頭)
イ 向こう1か月の気象予報では、前線の影響等により降水量が多いとされている(±)。

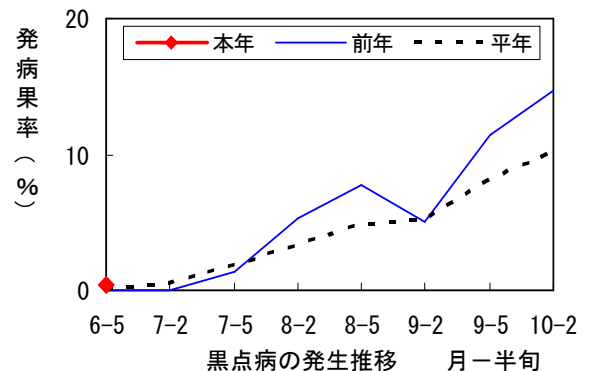


- (3) 防除上の注意
ア 今後の飛来状況に十分注意する。
イ コブノメイガに効果のある箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。
また、移植期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。
ウ ほ場内では集中分布をするので、ほ場全体の発生状況を把握する。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年よりやや多
- (2) 予報の根拠
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病果率 0.5% (平年 0.1%、前年 0%)
発生ほ場率 16.7% (平年 8.4%、前年 0%)
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(+)



- (3) 防除上の注意
ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出して処分する。
イ 前回の散布から1か月後、又は積算降水量 250mmを目安に防除を実施する。

2 ミカンハダニ

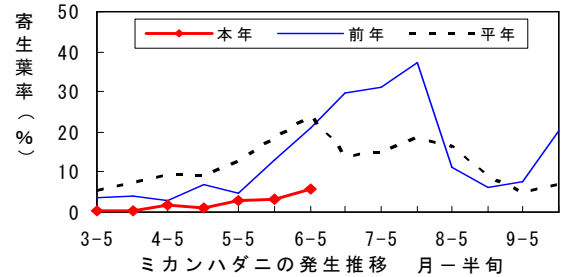
- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。
寄生葉率 5.5% (平年 23.8%、前年 21.0%)
発生ほ場率 41.7% (平年 67.0%、前年 54.5%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

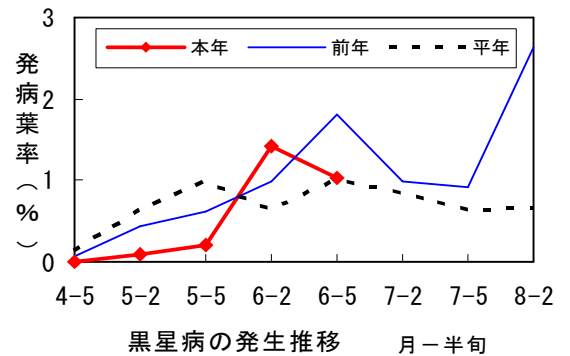
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病葉率 1.0% (平年 1.0%、前年 1.8%)
発生ほ場率 41.7% (平年 51.2%、前年 58.3%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 罹病葉や罹病果実は伝染源となるので除去し、園外に持ち出し処分する。
- イ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



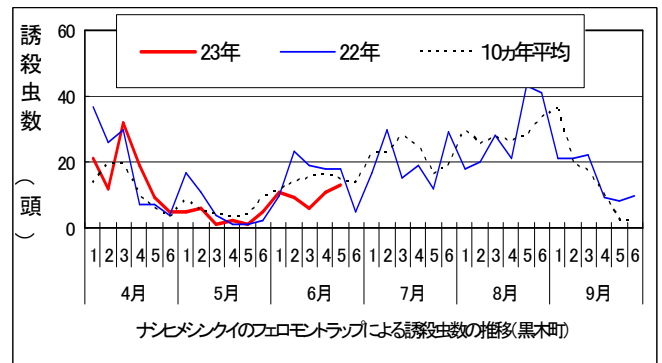
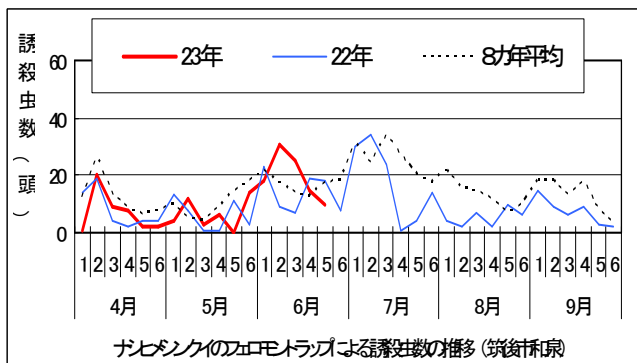
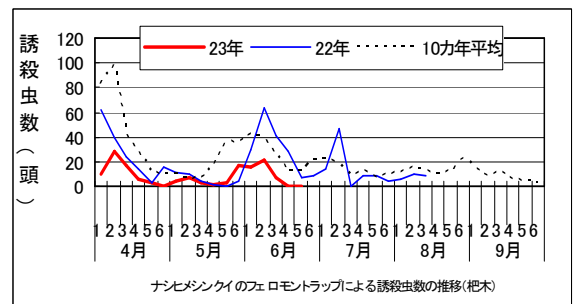
2 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 第1世代成虫発生時期(5月4半旬)から6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は平年並であった(±)。
<県内3カ所の平均>
87頭(平年 144頭、前年 119頭)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(±)。



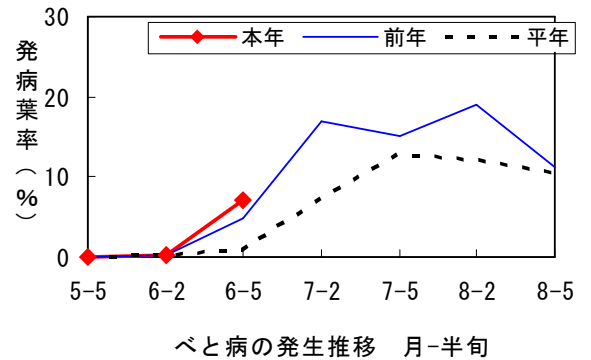
(3) 防除上の注意

- ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行なうが、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7~10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

【果樹：ぶどう】

1 ベと病

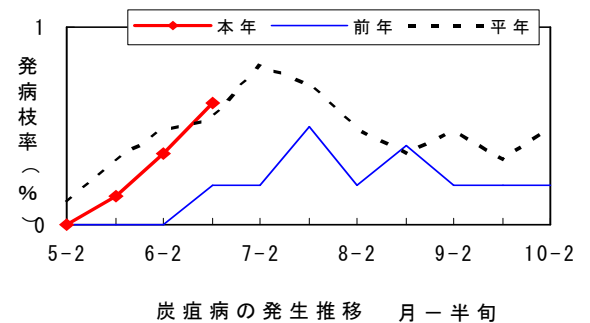
- (1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多・前年並
- (2) 予報の根拠
 - ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。
発病葉率 7.0% (平年 1.0%、前年 4.7%)
発生ほ場率 33.3% (平年 24.7%、前年 54.5%)
 - イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(+)。
- (3) 防除上の注意
 - ア 発病後の防除では効果が低いので、予防散布を徹底する。
 - イ 伝染源となる罹病葉は見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。
 - ウ ボルドー液は、散布直後に降雨があると薬害が発生するので注意する。



【果樹：かき】

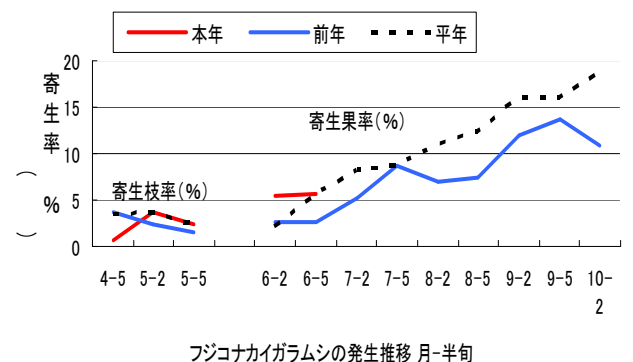
1 炭疽病

- (1) 予報の内容
発生量：平年並・前年よりやや多
- (2) 予報の根拠
 - ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病枝率 0.6% (平年 0.5%、前年 0.2%)
発生ほ場率 23.1% (平年 20.1%、前年 7.1%)
発病果率 0.2% (平年 0.0%、前年 0%)
発生ほ場率 7.7% (平年 1.2%、前年 0%)
 - イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(+)。
- (3) 防除上の注意
 - ア 伝染源となる罹病枝や罹病果実は見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。
 - イ 前年発生の多かった園や本病に弱い「早秋」では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
 - ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
寄生果率 5.6% (平年 5.7%、前年 2.7%)
発生ほ場率 84.6% (平年 64.8%、前年 57.1%)
 - イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(±)。
- (3) 防除上の注意
 - ア 混み合った枝葉を整理し、散布ムラがないように丁寧に薬剤散布を行う。
 - イ 薬剤散布にあたっては、できるだけ天敵類に影響の少ない薬剤を選択する。



【果樹：いちじく】

1 アザミウマ類

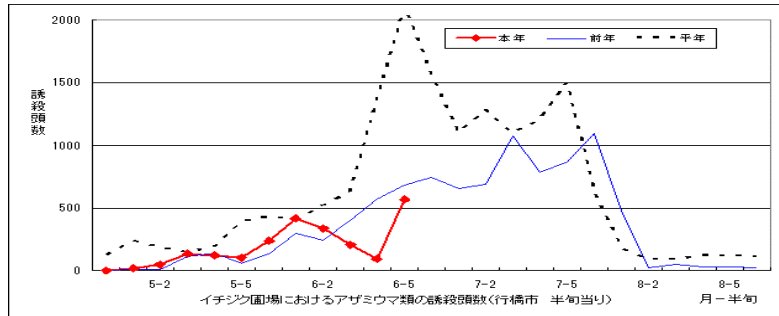
- (1) 予報の内容
発生量：平年より少、前年よりやや少
- (2) 予報の根拠
 - ア 6月1半旬から5半旬までの誘引剤における誘殺虫数は、平年より少なかった(-)。

<調査地点:行橋市西泉>

1,613 頭(平年 5,010 頭、前年 2,185 頭)

イ 向こう 1 か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(±)。
(3) 防除上の注意

- ア 園地周辺の 7~8 月に開花する植物でも増殖するので、畦畔等の除草に努める。
- イ ほ場で発生が認められたら、定期的に薬剤防除を行う。



【果樹：共通】

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年より少(平成 20 年並)

<参考:チャバネアカカメムシの発生状況>

- 本年 : 越冬量 0.7 頭/m²、ヒノキ球果着生量 中
- 前年 : 越冬量 2.0 頭/m²、ヒノキ球果着生量 やや少、後期発生型
- 平成 20 年 : 越冬量 0.5 頭/m²、ヒノキ球果着生量 やや多、後期発生型

(2) 予報の根拠

ア 4 月 1 半月から 6 月 5 半月までの予察灯のチャバネアカカメムシ誘殺虫数は、前年より少なく、平成 20 年並であった。

また、ツヤアオカメムシ誘殺虫数は、前年・平成 20 年より少なかった。

<調査地点:本所管内筑紫野市>(前年比 -)

- チャバネアカカメムシ 675 頭(前年 1,124 頭、平成 20 年 608 頭)
- ツヤアオカメムシ 140 頭(前年 1,279 頭、平成 20 年 1,662 頭)

<調査地点:筑後支所管内八女市黒木町>(前年比 -)

- チャバネアカカメムシ 351 頭(前年 447 頭、平成 20 年 151 頭)
- ツヤアオカメムシ 14 頭(前年 294 頭、平成 20 年 79 頭)

イ 4 月 1 半月から 6 月 5 半月までのフェロモントラップの誘殺虫数は、前年並で平成 20 年より少なかった。

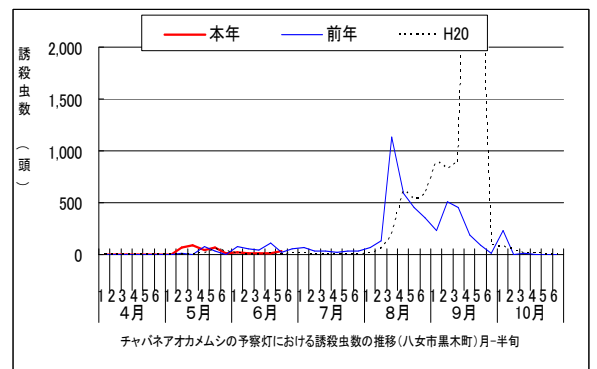
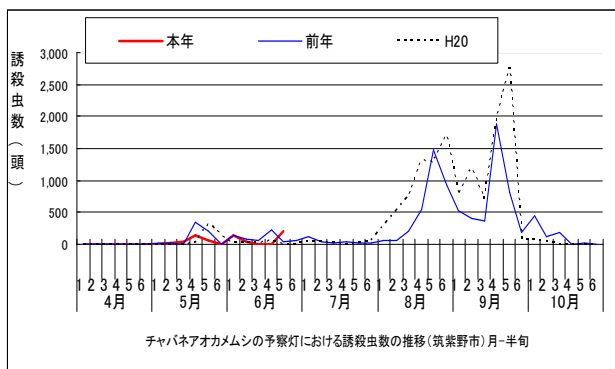
<調査地点:筑紫野市吉木>(前年比 ±)

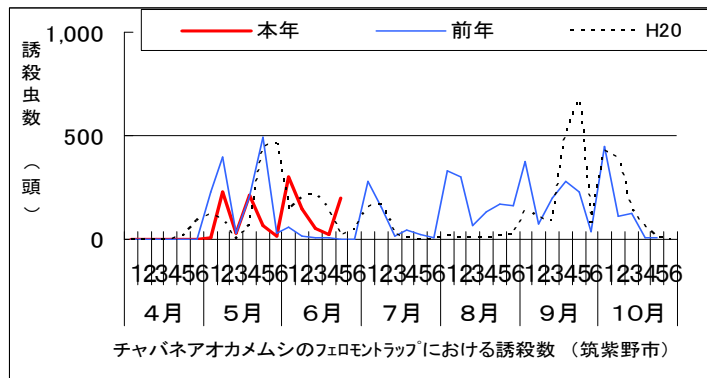
- チャバネアカカメムシ 1,283 頭(前年 1,476 頭、平成 20 年 2,206 頭)
- ツヤアオカメムシ 143 頭(前年 370 頭、平成 20 年 971 頭)

ウ 6 月 5 半月調査では、ナシ果実の被害果は認められなかった(-)。

被害果率 0%(前年 0%、平年 0.2%)

エ 向こう 1 か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は多いとされている(±)。





(3) 防除上の注意

ア カメムシの発生量は少なく、7月は果樹園の飛来は少ないと予想されるが、園内における発生状況の把握に努め、飛来量が多い場合は防除を行う。

【果樹：その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (7月の発生予報) | | 防除上注意すべき事項等 |
|-------------|-------------|------------------|-----|-------------------------------------|
| | 平年比 | 平年比 | 前年比 | |
| ナシ ハダニ類 | 並 | 並 | 多 | ・多発生すると防除が困難になるので、発生の少ない時期の防除を徹底する。 |
| カキ うどんこ病 | やや少 | やや少 | 並 | ・葉裏にかかるよう丁寧に散布する。 |
| ハマキムシ類 | 並 | 並 | やや多 | ・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。 |

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉数 3.6葉 (平年 0.3葉、前年 1.3葉)

発生ほ場率 66.7% (平年 7.2%、前年 20.0%)

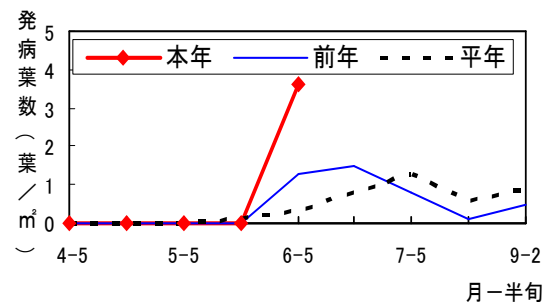
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+).

(3) 防除上の注意

ア 二番茶摘採後、刈り落とし後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



炭そ病の発生推移

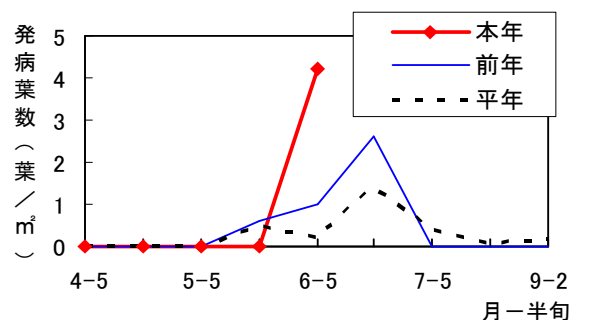
2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。



もち病の発生推移

発病葉数 4.2葉 (平年 0.2葉、前年 1.0葉)

発生ほ場率 77.8% (平年 6.8%、前年 6.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 三番茶を摘採する園では二番茶摘採後、萌芽から1葉期までに防除を行う。

摘採しない園では、秋芽の萌芽から1葉期までに防除を行う。

3 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

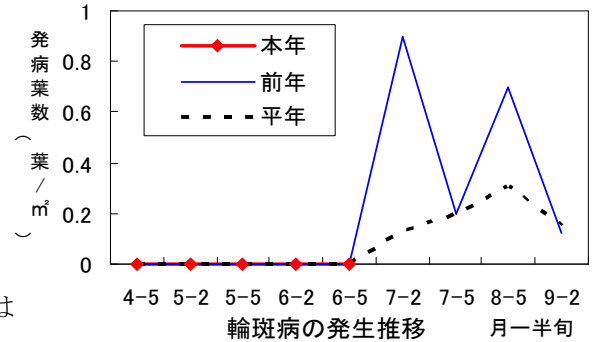
発病葉数 0葉 (平年 0.0葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0% (平年 0.4%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 葉や茎の傷口から病原菌が侵入感染するため、二・三番茶摘採又は刈り落とし当日か翌日に防除を行う。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

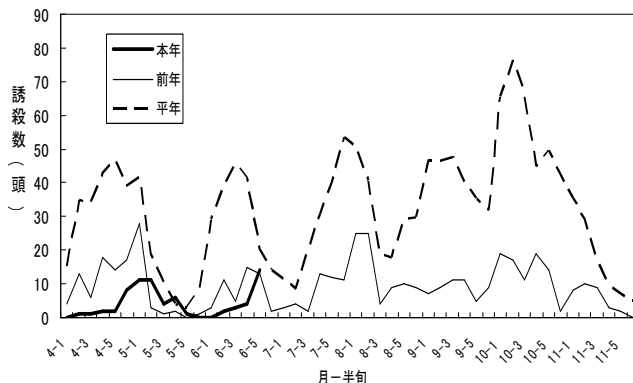
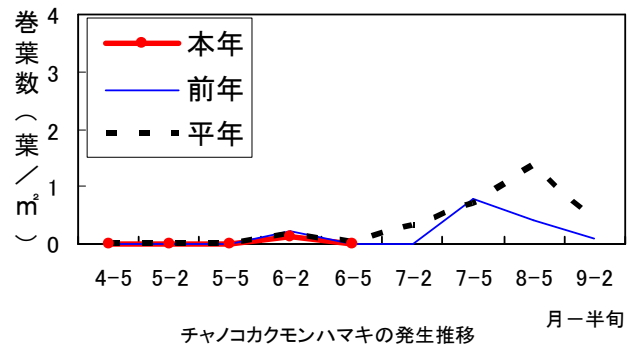
(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

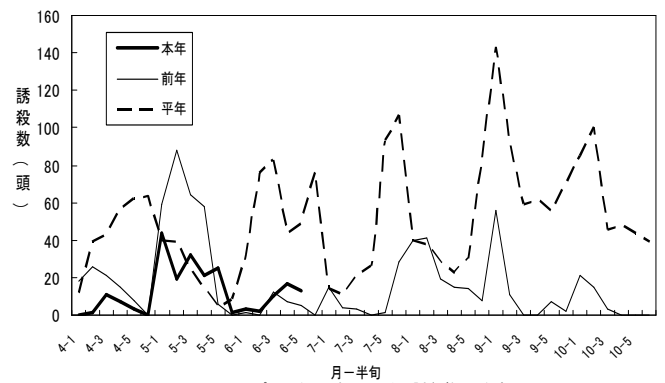
被害葉数 0葉 (平年 0.04葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0% (平年 3.5%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+)



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(筑後市)



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(八女市)

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、8月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

被害葉数 1.1葉（平年 1.3葉、前年 0.3葉）

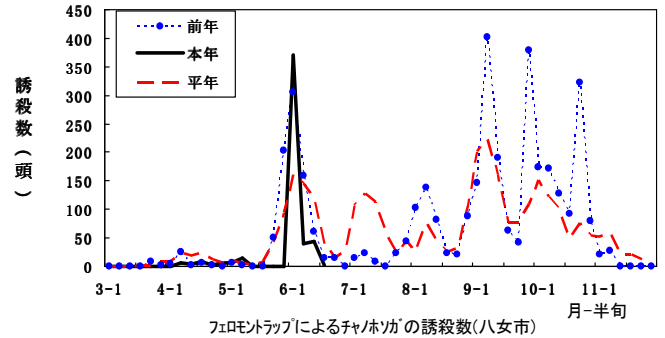
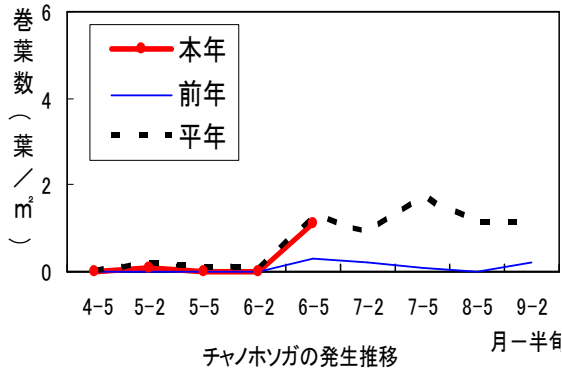
発生ほ場率 77.8%（平年 27.1%、前年 13.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている（-）。

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月上～中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



6 チャノミドリヒメコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

たたき落とし虫数 0.31頭（平年 0.8頭、前年 1.7頭）

発生ほ場率 22.2%（平年 46.6%、前年 73.3%）

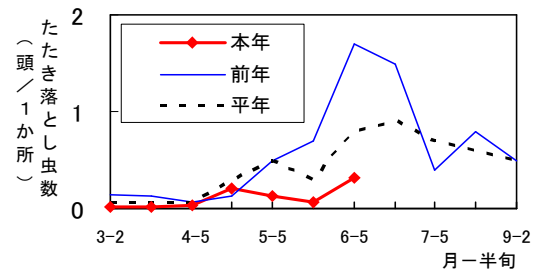
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし（A4版上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



チャノミドリヒメコバイの発生推移

7 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生葉率 0.44%（平年 7.4%、前年 0%）

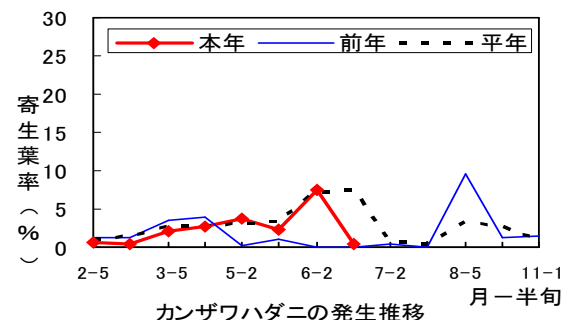
50葉当たり虫数 0.33頭（平年 23.1頭、前年 0頭）

発生ほ場率 11.1%（平年 35.6%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、摘採後、多発する前に速やかに防除を行う。



カンザワハダニの発生推移

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

8 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

たたき落とし虫数 1.3頭 (平年 9.0頭、前年 1.7頭)

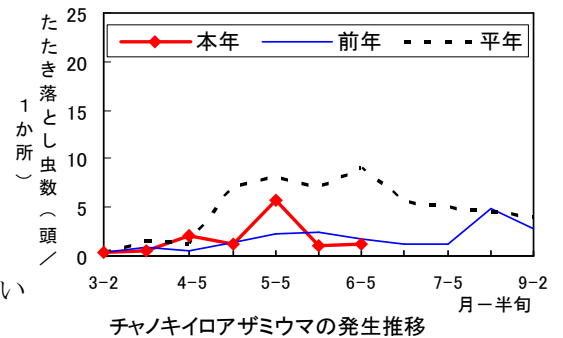
発生ほ場率 100% (平年 93.1%、前年 73.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 梅雨明け後の乾燥により多発する可能性があるため、発生状況に留意し、たたき落とし(A4版上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜：イチゴ】

1 うどんこ病 (育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年 (過去7か年平均) ・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量はやや少なかった(－)。

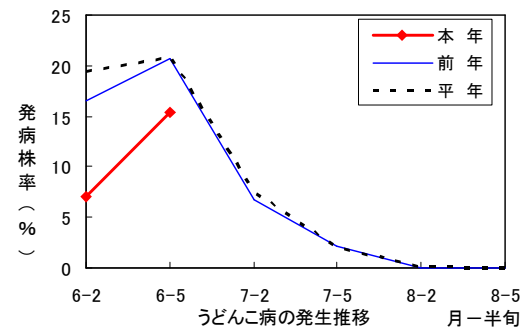
発病株率 15.4% (平年 20.8%、前年 20.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の間隔を空け通風を図る。

イ 伝染源である罹病葉は、摘葉するとともに、育苗期の薬剤防除を徹底する。



2 炭疽病 (育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年 (過去7か年平均) ・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生は認めていない(－)。

発病株率 0% (平年 0.2%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+)。

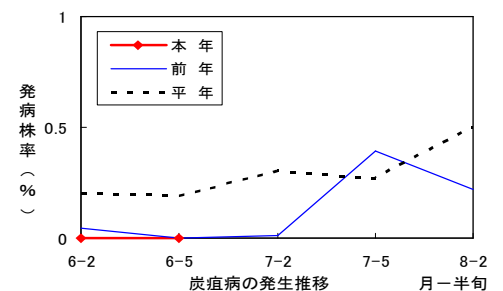
(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温期の降雨やかん水により急速に蔓延するので、ほ場内での発生状況に注意し、罹病苗は速やかに持ち出し処分する。

イ 雨よけ育苗等で風通しが悪いと発生しやすいため、苗の間隔を空け通風を図るとともに、鉢の土壤水分を適切に保つようなかん水を行う。

ウ 窒素肥料を多用すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

エ 発病後の薬剤散布は効果が低いので、葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的に、予防散布を徹底する。



【野菜：その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (7月の発生予報) | | 防除上注意すべき事項等 |
|-----------------------|-------------|------------------|-----|--|
| | 平年比 | 平年比 | 前年比 | |
| イチゴ ハダニ類 | やや少 | 並 | 並 | <ul style="list-style-type: none"> 多発生後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を行う。 ほ場内や周辺の除草を徹底する。 |
| アスパラガス 斑点性病害 | 並 | やや多 | やや多 | <ul style="list-style-type: none"> 過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。 多発生後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、防除を徹底する。 黄色蛍光灯を設置しているほ場では、日没1時間前～日の出後1時間点灯する。 |
| アザミウマ類 | 並 | 並 | やや多 | |
| チョウ目 (ハモントウ・材カバコガ) | 並 | 並 | 並 | |

農薬の危害防止に努めましょう ～6月から8月は「農薬安全使用運動」期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月から8月を「農薬安全使用運動」の実施期間として定め、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮等について周知徹底するとともに、農薬による事故などを防止することを目的として、安全使用講習会の開催、啓発チラシの配布等関係機関、団体が一体となって取り組んでいます。

散布者の安全はもちろん、人畜、隣接作物、河川等への配慮についてご指導をお願いします。

なお、平成23年2月4日付農林水産省消費安全局長、環境省水・大気環境局長通知により、**農薬として「ツバキ油粕」等を使用することは禁止されております**ので、併せてご指導をお願いします。

農薬安全使用運動重点啓発事項

- ① 農薬ラベル確認の徹底
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数)
- ② 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底
 - ・ 風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
 - ・ 飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
 - ・ 散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意
- ③ 水田除草剤や本田粒剤は、使用後7日間の止水を遵守
 - ・ 水田において農薬を使用するときは、止水期間を1週間程度とし、落水・かけ流しをしない。
- ④ 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄
- ⑤ 防除履歴の正確な記帳
 - ・ 薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳

福岡県病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>
電子メール byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp

